

人間関係づくりを目的としたグループ・アプローチの実践 —教育センターと学校が連携して取り組んだ実践事例—

教育相談課 課長 木村 正徳

【要旨】 本報告は、教育センターと学校が連携して取り組んだ実践事例である。

筆者らが行うグループ・アプローチの授業を実践校の教員に示すことから始め、このことが、教員達にグループ・アプローチへの理解と興味を持たせる結果となり、グループ・アプローチを学校の研究主題に位置づけ、学校全体で取り組むに至った事例である。その結果、Q-U（学級集団分析尺度）の学校生活満足群に位置する生徒が、1年間でどのクラスも50%（全国平均35%）を超えるようになった。

【キーワード】 人間関係づくり、グループ・アプローチ、不登校予防、Q-U、ラボラトリ方式

1 はじめに

本県は、長らく1000人あたりの不登校出現率が高い状態にあった。現在（平成24年）は少しずつ全国平均に近づきつつある。本県の不登校をさらに減らすために、また、二度と増加させないために、不登校予防としてのグループ・アプローチの実践とその周知を教育相談推進事業の一つの柱として取り組んできた。

（グループ・アプローチの詳細は、3章で述べる）
本実践は、
グループ・
アプローチ
を中学校の
「人間関係
づくり」に



導入し、それをもとに生徒のソーシャルスキルや対人関係能力を高めながら学校運営に生かしていきたいという実践校の学校長からの要請を受けて、教育センターと学校が連携して取り組んだ実践である。

2年間の取り組みであるが、Q-Uの学校生活満足群に位置する生徒が、1年間でどのクラスも50%を超えるようになったことが、この実践による効果を物語っていると考える。

実践校は、かつては不登校生徒の多い学校であった。そのため、教育相談課員が教員のコンサルテーションや保護者面接のために定期的に学校を訪問していた。その縁で、学校長より「不登校生徒は減ってきているけれども、生徒達のト

ラブルが絶えない。そのことへの手立てとして、グループ・アプローチを行いたい。本校の教員に一度グループ・アプローチを見せてくれないか」との依頼があり、この連携が始まった。

どのような実践計画も、教員全員のものとして取り組まなければ、形だけの実践で終わってしまう。特に生徒指導上の問題に手を焼いているわけでもなく、授業が成立しにくいわけでもない。むしろ、不登校が減少傾向にあり、クラブ活動も盛んに行われている学校においては、「そこまで必要か」という雰囲気になりやすい。管理職からの提案ならなおのことである。ややもするとその様な雰囲気になりやすい教員に対して、落ち着いている今だからこそ取り組める実践であり、決して難しいものではなく、生徒は楽しく、教員は充実感を持って取り組める実践であることを体験的に理解してもらひながら進めて行った実践である。

最初に、学校長がグループ・アプローチを導入したいと考えた背景と、教員が全員で取り組み始めるまでの実践導入過程について述べる。

2 実践校の背景

実践校は、県下有数の農村地域であり、海に面しているため、漁業も行われている。農業、漁業、商業の混在した地域の中規模校である。以前は不登校生徒の出現率が高かったが、現在は減少傾向にある。クラブ活動の盛んな学校で、少年、少女のスポーツクラブチームも盛んであ

る。生徒指導上の問題については、近隣の学校とほとんど変わらない状況である。

当時の2年生は、小学校6年生の時に児童の指導に課題のあった学年であった。実践校に進学してくる生徒のほとんどがその小学校から入学してくる。入学に際して、中学校は授業実践や生徒指導に実績のある教員を配置して、学年経営にあたった。その甲斐あって、大きな生徒指導上の問題もなく、授業も整然と行われていた。しかし、これで大丈夫というわけではなく、気を許せばいつまた生徒指導上の問題に振り回されるようになるか分からぬ緊張感があった。

もともと思春期女子は、成長課題からくる心理的不安定さから、一人の生徒をグループから排除したり、悪口（陰口）を言ったり、そのことについて敏感になりトラブルとして発展し、問題化しやすい時期である。そこに指導に課題のあった時期（小学6年生時）に、男子と女子の間がぎくしゃくし、男女間の仲が悪くなり、クラスの雰囲気を重くしていたことが影響してか、女子生徒の間の対人関係上のトラブルがよく起きた。そのトラブルの対応に時間を割くことも多々あった。

また、前年の終わりに実施したQ-Uでは、荒れはじめの学級集団であるという分析結果がだされた学級がいくつかあった。

このようなことを背景として、学校長が生徒の人間関係作りにグループ・アプローチを取り入れたいと考えたのである。

3 実践導入過程

（1）グループ・アプローチについて

実践導入過程を述べる前に、本教育センターが考えるグループ・アプローチについて述べる。

近年、児童生徒の社会的スキル（ソーシャルスキル）の低下が言われている。そのため、勝手な行動をとってグループ活動ができなかつたり、対人関係上のトラブルがあつたり、いじめや仲間はずれが平然と行われていたりして、不登校の一因にもなっている。その背景として、少子化や核家族化、家

庭環境の変化や社会全般の生活環境の変化など様々なことが言われている。この児童生徒の社会的スキルの向上を図り、対人関係能力やコミュニケーション力を培う効果的方法として、グループ・アプローチが取り上げられている。グループ・アプローチは当センターが、グループ活動をとおしてそれぞれの参加者に心理的、行動的アプローチを行い、心理的援助、人間的成长、ソーシャルスキルの向上を目的とする活動と定義して、それを総称して呼んでいるもので、「ソーシャルスキル・トレーニング」、「構成的グループエンカウンター（S G E）」、「アサーション・トレーニング」、「ラボラトリ方式」などがある。

（2）ラボラトリ方式から始めることについて

クラスや児童生徒の状況や担任の目的に応じて、「構成的グループエンカウンター」を行ったり、「アサーション・トレーニング」を行ったりするのであるが、これらはファシリテーター（学校にあっては授業者）の理解度と経験によって効果に差が出やすくなる。筆者は、10数年前から児童生徒の社会的スキルを培う必要性を感じ、その方法としてグループ・アプローチが有効であることを、文献などで知っていた。この方法を学校に周知することによって、児童生徒の対人関係能力やコミュニケーション力の向上が図られ、学校での子ども達のストレスを軽減することができ、結果として不登校予防に繋がると考えていた。しかし、指導者の意図どおりの効果を生むには、ファシリテーターの経験と力量が大きく影響し、そのためには多少の訓練が必要であることが課題となっていた。また、学校ではすぐにできて効果があがるものでないとなかなか行ってもらえないことをそれまでの経験から知っていたこともあり、「ラボラトリ方式」を知って、これだと直感した。



その理由は次の五つである。まず、第一にすぐに使えるツール（コピーしてすぐに使える）があること。第二に子ども達の知的好奇心を刺激し、興味を持って楽しめること。第三に一人でも協力しない者がいると課題が解けない仕組みになっているために、必然的に協労的になること。第四に協労作業によってグループのメンバーが仲良くなれること。第五に何よりファシリテーターの経験がなくても一定の効果を得ることができると思ったからである。

まず、「ラボラトリー方式」から始め、協労作業によってクラスの人間関係を円滑にしながら、クラスの課題解決に向けたエクササイズを行っていく土台を作っていく。そのことによって少しずつファシリテーターとしての経験を積み、「構成的グループエンカウンター」や「アサーショントレーニング」など課題に即したエクササイズを行っていくのである。とりあえず「ラボラトリー方式」から始めて、クラスの課題に照らし、「構成的グループエンカウンター」や「アサーション・トレーニング」を行っていけばよいと考えた。

(3) ラボラトリー方式からの実践

実践校からの依頼に対して、まず、「ラボラトリー方式」のエクササイズを教員に見てもらって、自分たちでもできそうだと思ってもらえば成功だと考えた。何よりも興味を持ってもらうことである。

最初のグループ・アプローチの授業は、1年生のクラスで行った。その授業を全教員で参観するというものであった。グループ分けのエクササイズ（ベースデーチェーン）を行い、グループ分け（男女混合のグループ）をして、その後、「ラボラトリー方式」のエクササイズ（注1）を行った。エクササイズには課題（問題）があり、その課題を解決するための情報カードを1人4枚から5枚持ち、口頭でのみ書かれている情報を伝えることができるルールである。情報カードを人に見せたり、人のカードをのぞいたりしてはいけないというルールである。全員の情報を合わせないと問題が解けない仕組みに

なっている。生徒達は順番に情報カードを読みながら問題を考えていく。体育館でグループ毎に車座になって座っているが、問題を解くことに一生懸命になってくるにつれて、生徒の頭が真ん中に寄ってくるのがよく分かる。車座の円が少しづつ解答用紙に集まり、円が小さくなってくるのである。それは、グループのメンバーの心理的距離を表していると筆者は考えている。円が大きければ心理的距離があり、小さくなれるにつれて心理的距離が近くなってくるということである。

問題を解き、解答が正解だった時の生徒の喜びの声は歓喜と達成感にあふれていた。間違っている時のがっかり感も対照的である。そこからめげずにやり直すときのグループの気迫は十分に伝わってくるものであった。全グループが終わってから、振り返りを行い、感想を書いてもらう。生徒全員が「楽しかった」「またやりたい」「普段話さない人と話せてよかった」など大好評のグループ・アプローチであった。

その様子を見ていた教員からは、「普段見ることの出来ない生徒の様子が見られて実に良かった」「あの子に、あんな一面があるとは知らなかった」「生徒が生き生きしていて良かった」など、好感触を得ることができた。

グループ・アプローチ後の現職教育では、筆者の考えるグループ・アプローチの必要性を語った。その後、校長室で雑談をしていると、2年生の学年主任が、「近くある、授業参観でグループ・アプローチをしてみたいから、他に何か案（エクササイズ）はないか」と言ってきた。筆者は、普段の授業なら良いが、授業参観でいきなり先生方がグループ・アプローチを行うのは冒険的であるから、学年一緒にまとめてもう一度筆者が行っても良いと伝えると、是非お願いしたいということであった。

(4) 二度目のグループ・アプローチ

二度目のグループ・アプローチの授業は、2年生の学年3クラスを一度に行つた。2年生は、小学校の時に児童の指導に課題のあった学年である。また、女子生徒のトラブルも多い学年で

ある。各クラス単位でバースデーチェーンを行い、並んだ順番でグループを決めた後、簡単なゲーム（アイスブレーキング（注2））をして、メインのエクササイズを行った。エクササイズは、1年生で行ったのと同じ種類の情報カードによって、課題を解いていくラボラトリ方式のエクササイズである。

最初からやる気のあるグループとそうでないグループ。一人二人協力をしない生徒のいるグループ。男子は男子で固まり、女子は女子で固まり、協力して課題を解決しようとする雰囲気のないグループもあった。男女の仲が悪い学年であるということがよく分かった。

20分の時間制限をもうけてエクササイズを始めた。協力的に課題に取り組んでいるグループの生徒の頭は小さな円となって集まり、協力的でないグループは広まった円のままであった。円から一人外れて座っている生徒もいた。様子を見ていると、グループの雰囲気が良く伝わってくる。

約5分経過したところで、問題を解いたグループの声が上がった。すぐに次に問題を解いたグループの声が上がる。次々に「できた」「やった」という声が上がり、協力的でないグループが取り残されていく。問題を解いたグループの声に刺激されて、協力をはじめ、問題解決に真剣に取り組み出すグループも現れてくるが、それでも動かないグループもあった。20分の制限時間が来るので、「時間になったので終わって良いですか？」と訊くと、「待って、もう少し待って」という女子生徒の声が聞こえた。「10分延長します」と言うと、その女子生徒がグループのメンバーに指示を出しあげた。

エクササイズが始まっているから、やる気なさそうにしていたグループである。女子生徒がリーダーシップを取り



始めると、少しづつ円が小さくなり始め、5分もしないうちに問題を解いてしまった。自分たちが主体となって動いた時の力の凄さを体験した瞬間である。協力することとしないことの違いを体験したグループであった。最後までできなかつたグループは、全く協力しない男子生徒がいるグループであつた。

その様子を見ていた、教員達は、協力できない男子と女子、グループになると人まかせになる生徒、全く協力しない生徒の存在、などを目の当たりにして、普段自分たちが感じていた2年生の課題が浮き彫りにされたようであつた。

後日、3年生についてもグループ・アプローチの依頼を受け、実施する。

3年生は、比較的まじめに意欲的に課題に取り組んでいた。

(5) 学校全体としての取り組みの始まり

教育センターの筆者らのグループ・アプローチを見た教員達は、少なからずグループ・アプローチに興味を示した。

興味を示した教員達に、グループ・アプローチを学校の研究主題として取り組みたいという学校長の方針が受け入れられるのに、時間はかからなかつた。

教育委員会の指導訪問の研究授業でグループ・アプローチの授業を行うから、授業についてアドバイスして欲しいという要請が学校長よりあり、指導訪問に同席することとなる。

授業は、3年生の「ソーシャルスキル学習」で「上手な断り方」という題材のアサーション・トレーニングのプログラムであった。2名の担当教員がファシリテーターとなり、3年生全員を対象に授業を行つた。生徒にロールプレイを行わせる前に担当教員がロールプレイを行つてみせた。熱演で、見ている生徒達にも大受けで、盛り上がり、良い雰囲気ができあがつた。それから生徒に「頼む側」「断る側」の役割を交互に取らせロールプレイを行わせた。しかし、生徒にはなかなか難しい課題であったのか、役割としての演技がうまくできず、途中で止めてしま

ったり、照れてやらない生徒があちこちで見受けられた。

良くない誘いに対する断り方を学ばせようとする意図は理解できる。中学校においては生徒指導は重要な課題であり、特に、良くない誘いを断る力を持つて欲しいと願うのはどこの教員も同じである。先生方の気持ちが強く表れた授業であったが、内容が生徒達には難しかったと思われた。

グループ・アプローチは内容とそれを行うファシリテーターによって結果が決まる。意図する内容と、グループ・アプローチを行う生徒の実態との間に差があると、ねらいは達成されない。中学生のレベルに、その子らの現在持っているスキルに照らした内容をいかに用意するかが、グループ・アプローチ成功の鍵となる。そのことを十分に考えさせてくれた授業であった。最初からうまくできなくて当然である。そこから何を学ぶかが重要である。その意味で、この研究授業は大変意味ある授業となった。

その後、これらのことと参考にグループ・アプローチの学習計画が立てられた。

4 グループ・アプローチ実施状況

筆者の授業以降、各学年で実践校の教員が実施したグループ・アプローチの内容は以下のとおりである。〔実施校ではグループ・アプローチのことをグループワークとよんで行っている〕

【1年生】

(入学から10月まで、計6回)

○目的：適切な対人関係を築き、人間力を向上させる。

実施月：5月

テーマ：Q-Uテスト

ねらい：Q-Uを用いて、生徒一人ひとりの状況（承認感、被侵害・不適応感）を把握するとともに、学級集団の状態を分析する。

実施月：6月

テーマ：自己紹介すごろく

ねらい：簡単な遊びを通して、自分を理解してもらう伝え方、人の話を聞く態度を養う。

〈子どもの社会的スキル横浜プログラム

(横浜市教育委員会) より〉

実施月：6月

テーマ：聴き方上手になれるかな
～話すこと・きくこと体験～

ねらい：話の聴き方によって話やすくなったり話しにくくなったりすることを知る。友達と思いやりのある会話や話し合いができるようになる。

〈子どもの社会的スキル横浜プログラム
(横浜市教育委員会) より〉

実施月：7月

テーマ：ムシムシ教室の席がえ

ねらい：人の話をよく聴いたり、タイミング良く話したりすることの大切さを体験する。

〈学校グループワーク・トレーニング3
(遊戲社) より〉

実施月：9月

テーマ：お願いします

ねらい：相手の気持ちや立場を尊重しながら頼み事をする方法を身につける。

〈子どもの社会的スキル横浜プログラム
(横浜市教育委員会) より〉

実施月：10月

テーマ：僕らのクラス

ねらい：望ましいクラスについて考え、意見を出しあい、自分たちのクラスについて振り返り、クラスの課題を発見する。

〈学校グループワーク・トレーニング3
(遊戲社) より〉

【2年生】

(1年次6月より2年次11月まで、計12回)

○目的：生徒の人間関係を良好にし、市民性の育成を期する。

実施月：1年次9月

テーマ：嵐の里

ねらい：グループワークを通じて、コミュニケーションをとる中（とらざる得ない中）で、幅広い友人関係を築く。お互いの良さを広く認め合う。

〈新版 Creative Human Relations「202.嵐の里」
(株式会社プレスタイル) を筆者がアイドルグループ嵐のメンバーに書き換えて改良したもの〉

実施月：1年次9月	テーマ：「これだけは許せない」ランキング ねらい：今後のグループ活動を進めるにあたり、どういう行為をしてはいけないかをお互いに認識し、今後の取り組みをスムーズに進める。互いに意見を出しあうことにより、互いの考え方を知り、理解を深める。
実施月：1年次10月	実施月：2年次8月
テーマ：匠の里 ねらい：グループワークを通じて、コミュニケーションをとる中（とらざる得ない中）で、幅広い友人関係を築く。コミュニケーションに必要な声の出し方、態度を学ばせる。 (新版 Creative Human Relations 「202.匠の里」(株式会社プレスタイル))	テーマ：先生ばかりが住んでいるマンション ねらい：お互いに情報を交換し、コミュニケーションを図りながら、互いの親近感を深める。 (学校グループワーク・トレーニング（遊戯社）より)
実施月：1年次10月	実施月：2年次9月
テーマ：島耕作 ある日の出来事 ねらい：時と場に応じた言動とスキルを身につける。グループ討議を通じて、意見を言う、意見を聞く態度、スキルを養う。互いのよい点に気づく。 (道徳教材「自分を見つめる」より)	テーマ：バースデーチェーン（グループ分け） 自己紹介すごろく ねらい：互いにすごろく遊びの形式で自己紹介を行い、互いの理解を深める。 (子どもの社会的スキル横浜プログラム（横浜市教育委員会）より)
実施月：1年次10月	実施月：2年次10月
テーマ：クラスにとって大切な人は、どんな人？ ねらい：学級役員を選出するときに、リーダーを選ぶ基準を学ぶ。理由をつけて、自分の意見をまとめ。リーダーの資質を考えることにより、自己をみつめ自己の向上をはかる。	テーマ：ちょっと大人の楽しみ上手、盛り上げ上手 ねらい：楽しむときは楽しむ、特に、体育祭があり、みんなが楽しめるよう気をつけることを考えさせる。
実施月：1年次10月	実施月：2年次11月
テーマ：僕らの編集室 ねらい：活動的なグループワークで、協力してものごとを成し遂げることを学ぶ。 (学校グループワーク・トレーニング（遊戯社）より)	テーマ：目指せ！最強のメンバー ねらい：リーダーがそのリーダーシップを発揮できるように、まわりのメンバーが心がけることを知り、今後のグループワーク活動に活かしていく。
実施月：1年次11月	
テーマ：半分おとな、半分子ども ねらい：礼は、心と形がともなっていなければならないことを知り、適切な言動を心がけようとする実践意欲を培う。グループ討議を通じて、意見を言う、意見を聞く態度、スキルを養う。互いのよい点に気づく。	
実施月：2年次5月	
テーマ：Q-Uテスト ねらい：Q-Uを用いて、生徒一人ひとりの状況（承認感、被侵害・不適応感）を把握するとともに、学級集団の状態を分析する。	
実施月：2年次7月	

	(横浜市教育委員会) より)
実施月：3年次5月	実施月：3年次5月
テーマ：Q-Uテスト ねらい：Q-Uを用いて、生徒一人ひとりの状況（承認感、被侵害・不適応感）を把握するとともに、学級集団の状態を分析する。	テーマ：Q-Uテスト ねらい：Q-Uを用いて、生徒一人ひとりの状況（承認感、被侵害・不適応感）を把握するとともに、学級集団の状態を分析する。
実施月：2年次9月	実施月：3年次6月
テーマ：嵐の里 ねらい：言葉で伝えることの必要性と、グループ全体で課題を解決する達成感を共有する。 〈新版 Creative Human Relations 「202.嵐の里（株式会社プレスタイル）を筆者がアイドルグループ嵐のメンバーに書き換えて改良したもの〉	テーマ：宝島を脱出せよ ねらい：口頭での情報交換と話し合いにより、協力して課題解決をさせる。 〈学校グループワーク・トレーニング3（遊戲社）〉
実施月：2年次9月	実施月：3年次7月
テーマ：つながったね！みんなの心（長縄とび） ねらい：活動を通して、よりよい集団を作るためにはどんなことが大切なことを考える。 〈子どもの社会的スキル横浜プログラム（横浜市教育委員会）より〉	テーマ：あなたはどちら？ ねらい：さまざまな人の考え方の違いに気づかせる。 〈子どもの社会的スキル横浜プログラム（横浜市教育委員会）より〉
実施月：2年次9月	実施月：3年次9月
テーマ：「発見！僕・私のいいところは・・・」 ねらい：自分のよいところを指摘してもいい、多様な見方や自己認識との違いを知り、自分を見つめ直す機会とする。 〈子どもの社会的スキル横浜プログラム（横浜市教育委員会）発見ビンゴを作成〉	テーマ：上手な断り方 ねらい：要求に応じられないときに、適切に断る方法を考えさせる。 〈子どもの社会的スキル横浜プログラム（横浜市教育委員会）より〉
実施月：2年次10月	実施月：3年次10月
テーマ：「ケータイ安全教室」 ねらい：映像資料とプリント（自作）を活用し責任あるケータイの利用について理解する機会とする。 〈ケータイ安全教室映像教材〉	テーマ：クラスをパワーアップ やればできる ねらい：個人の意見をグループ内で一つにまとめ、発表するという活動を通じて、グループやクラスに一体感とやる気を起こす。 〈子どもの社会的スキル横浜プログラム（横浜市教育委員会）より〉
実施月：2年次11月	実施月：3年次11月
テーマ：犯罪から自分の身を守ろう ねらい：危険を感じ、回避する力など安全を見極め、危機を回避する能力をロールプレイの体験を通して身につける。 〈子どもの社会的スキル横浜プログラム（横浜市教育委員会）より〉	テーマ：めざせ五輪 ねらい：口頭での情報交換により、グループでのコミュニケーションを深め、情報処理方法を学ばせる。
実施月：3年次5月	
テーマ：未来予想図 ねらい：新しい一年間の生活に目標を見つけ、希望を持って望む。 〈子どもの社会的スキル横浜プログラム	

以上のように、グループワーク（グループ・アプローチ）の内容は、出版物やインターネットから取ることのできるエクササイズや、それを改良したり、参考にして考案したものである。クラスや学年の実情、さらにめざす生徒像をもとに選択されたエクササイズであるため、教員の思いが込められたグループ・アプローチになっている。今では、ネタとなる

エクササイズは数え切れないほどある。出版物やインターネットでの情報など探しいくらでも手に入る。そこから自分が実施しやすいものを、あるいは、筆者が「匠の里」を生徒が興味を持ってやれるよう「嵐の里」に改良したように手を加えるなどして、プログラムを考えればよい。そこに教員が面白さを感じてくれれば、後はしめたものである。

授業は、その内容に照らし合わせて、道徳や特活の時間に行っている。

5 グループ・アプローチ実践の成果

まず、何より1年間の実践で、Q-Uの学級生活満足群が各クラスとも50%（全国平均35%）を超えたことが大きな成果だといえる。最も高かったクラスは63%あった。

次に、実際の生徒からの声である。Q-Uの結果を受けて、今年度の3年生の担任が生徒と個人面談を行った。そのときに、「学校へ来るのが楽しくて仕がない」という生徒の声が何人からか聞かれた。また、男子と女子の仲が良くなつたという生徒が何人もいた。3年生は、小学校の時、児童の指導に課題があり、男女の仲がすこぶる悪かった学年である。その学年の生徒が、男女の仲が良くなつたと言つてゐるのである。筆者は、グループ・アプローチを不登校の予防対策として県下に周知しようと考えた。グループ・アプローチによって、コミュニケーション力が身に付き、クラスの生徒が仲良くなり、学校へ来ることが楽しくなれば、自然と不登校は減つてくるのではないかと考えたからである。まさに、そのことが起こつてゐるのである。不登校も、新たに不登校になつた生徒は一人も出でていない。最初の学校の課題であつた女子の間のトラブルも無くなつたわけではないが、少なくなつてきている。

もう一つ忘れてはならないのが、教員の生徒理解に対する意識の高揚である。Q-Uの結果と実際の生徒を重ね合わせて考えてみたり、生徒の実情に合わせてグループ・アプローチのプログラムを考えることによって、より目の前の生徒の姿をしっかりと見ようとする意識が高まつた。その結果、教員の生徒理解が進んだのである。グループ・アプローチを取

り入れることによって、生徒達のソーシャルスキルやコミュニケーション能力が向上し、生徒達の関係が良くなつただけでなく、教員の生徒理解も進んでいくことを今回の実践で見ることができた。筆者は、このグループ・アプローチの実践を、新しい教育カウンセリングの方法の一つであると考えている。カウンセリングは人間理解から始まる。人間のことが分かっていないと、共感的に話は聽けない。人間のことが分かるということはクライエントのことが分かるということである。クライエントはカウンセラーに分かってもらえていると感じているからこそ、自己開示がなされ、変容への道をカウンセラーとともに歩んでいけるのである。教育カウンセリングもカウンセリングと同じである。教育カウンセリングの場合は児童生徒理解がどれだけできているかである。児童生徒理解のないところに教育カウンセリングは成り立たない。グループ・アプローチの実践によって、教員の児童生徒理解が自ずと進んでいくことは、それがそのまま教育カウンセリングの実践になっているということである。Q-Uの結果と実際の児童生徒の比較をする。自分の予想通りの児童生徒はそれでよいが、予想と違う児童生徒もいる。教員の前で見せる姿とQ-Uから見えてきた違う姿の児童生徒もいるのである。そこから、新たな児童生徒的一面を知ることもある。（Q-Uの分析には筆者も学校へ行って教員と一緒に考え、アドバイスを行つた）また、グループ・アプローチの内容を考えるときに、クラスや学年の児童生徒の課題を考える。そのことによって、より学級経営や学年経営の方向性が定まつてくる。教員の明確な方向性のもと、学級、学年経営が行われて行くのである。

グループ・アプローチの取り組みは、児童生徒のソーシャルスキルやコミュニケーション能力を高め、お互いの人間関係をよくするだけでなく、教員の児童生徒理解を促す新しい教育カウンセリングの方法なのである。

6 まとめ

山本五十六の言葉に「やってみせ、言って聞かせてさせてみて、褒めてやらね

ば人は動かじ」という名言がある。どんなに大事なことでも、言葉や話だけではなかなか伝わらない。実際にやってみせて、どんなものか分かってもらって、やってみてもらう。それを一緒に考えながらよりよいものをを目指して頑張る。筆者が行ったことはこれである。まず見てもらおう。そこからそれを見た教員がどのような感想を持ち、いかに反応するか。それを見ながら次の手を考えていくのである。実際に、次の手を考えたのは学校長である。そういう意味でも、教育センターと学校が連携して取り組んだ実践事例である。そして、教員が乗ってくれば、どんどん自分たちで計画を立て、自分たちの願いや生徒の実態に即したエクササイズを考えていく。この行為が生徒理解につながる行為そのものなのである。そこに教員の気持ちが入っていく。生徒の課題を明確にし、それを何とか解決してやりたいと願う、教員の思いが、グループ・アプローチの授業にとって、もっとも大事なことなのかもしれないと思うのである。

最後に筆者が現在グループ・アプローチについてイメージしていることを述べて、結びに代えたい（図1）。

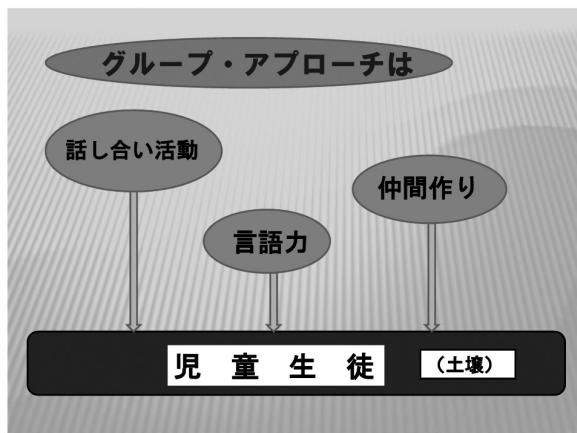


図1 グループ・アプローチのイメージ

教員がクラスの子ども達に「話し合い活動」「言語力」「仲間作り」などつけさせたい力があるとする。そのつけさせたい力の「種」を、お互いの関係が緊張感で固まっている児童生徒に蒔こうとしても、それは堅い土壌に蒔くようなもので、なかなか芽が出ないだろう。たとえ芽が出ても大きく育ちにくいだろう。グループ・アプローチは児童生徒のソーシ

ヤルスキルや対人関係能力を高めることを目的としたものであり、それは児童生徒の心を耕し、それぞれの関係性をよくする効果がある。言わば、児童生徒の土壌を耕し、肥料を加えることである。耕され、肥料が加えられた土壌につけさせたい力の「種」を蒔けば、芽も出やすく、出た芽も大きく育ちやすいだろう。グループ・アプローチは、児童生徒につけさせたい力の「種」の芽が出やすく、育ちやすくするための土壌作りなのである。

※本報告は、第61回読売教育賞優秀賞受賞論文に加筆修正を加えたものです。

<注釈>

注1 グループ・アプローチのねらいに沿ったプログラムのこと。

注2 メインのエクササイズに入りやすい雰囲気作りを目的とした、短時間のゲーム的プログラム。

<グループ・アプローチの参考文献>

ラボラトリ方式については、南山大学による研究が注目されている。本報告では主に、以下の2点を参考とした。

- ・「豊かで潤いのある学びを育むために」
報告書 平成19年3月発行 南山大学
- ・「教え学び支え合う教育現場の連携づくり」
中間報告書 平成20年3月発行 南山大学
2冊とも、教育推進G P推進本部編集

<ラボラトリ方式のエクササイズ等に関する参考文献>

- ・「学校グループワーク・トレーニング（改訂）」
横浜市学校GWT研究会編集 遊戯社（1989）
- ・「協力すれば何かが変わる一統・学校グループワーク・トレーニング」
日本学校GWT研究会編集 遊戯社（1994）
- ・「学校グループワーク・トレーニング3 友達っていいな自分でいいな」
日本学校GWT研究会編集 遊戯社（2003）
- ・「たのしいグループワーク」
大阪グループワーク研究会編集 遊戯社（2004）
- ・「子どもの社会的スキル横浜プログラム」
横浜市教育委員会（インターネット）
アドレスは以下のとおり

<http://www.city.yokohama.lg.jp/kyoiku/plan-hoshin/skill.html>